

回廊基壇際の地形の検討

— 第一次大極殿院の復原研究 8 —

はじめに 平城宮第一次大極殿院の回廊をはじめとする建物の基壇高決定のため、I - 2期における基壇際を中心とする地形の復原検討を進めた。それを推定する手掛かりは、東面回廊・西面回廊・北面回廊の内側（内庭と仮称）に雨落溝の遺構が部分的に確認されている一方、後世の削平などにより当該時期の地表面が残らない部分も多い。今回は、遺構から得られる直接的な標高が少ない部分、すなわちI - 2期に雨落溝が設けられていない南面回廊北方、遺構の残存状況の良くない南面回廊南方（朝庭と仮称）および磚積擁壁以北（壇上と仮称）にあたる東面回廊西方の地形について、検討をおこなった。

南面回廊北方 東西楼周辺すなわち南面回廊北方の一带では、I - 2期の東西楼増築にともない、礫敷広場と排水経路が改修されたことがあきらかとなっている（『平城報告XⅦ』）。具体的には、I - 1期には、磚積擁壁以南の礫敷広場（SH6603A）は北から南へと傾斜しており、地表を南流した雨水は、南面回廊の北雨落溝で左右に振り分けられ、大極殿院回廊の東南隅および西南隅に設けられた暗渠を通じ、排水される。しかしI - 2期には、東西楼増築のため、南面回廊北雨落溝が一部埋められた。そこで北方に東西溝SD5590Aを設けて排水路とし、回廊から北方にかけて南から北に下がる勾配をつけ礫を敷き直し（SH6603B）、SD5590Aへ排水するように改修した。この改修範囲については、2002年度に復原検討している¹⁾。今回は、それ以降に実施された調査を踏まえて再検討し、改修範囲と復原標高を示すこととした。その際、基本的な排水勾配を造る盛土造成と、仕上げとしての礫敷とでは、施工の意味と段階が異なるという点に注意し、盛土と礫敷がそれぞれにどの範囲に施工されているのかを検討した。

まず盛土と礫敷の北限は、平城第454次調査で平面的、断面的に確認しており、南面回廊基壇北縁から北へそれぞれ7m、18mの地点である。東西限については、平城第360次において西楼基壇西縁から西へ7mの地点で確認した、東から西へ落ちる段差を盛土範囲の西限と解釈した。東楼東方では同様の段差が明瞭でないが、東限も大極殿院中軸線から対称の地点まで盛土したと推定し

た。一方、礫敷の東西限は、遺構からは判然としない。しかし、北限の施工状況などから、礫敷も東西端に向けてI - 1期の礫敷との境界をあいまいにすりつけていたと考えることとした。なお、I - 2期の最終的な地表となる礫敷面の復原標高については、東半分で礫敷が良好に残るのに対し、西半分では残りが悪い。そのため、大極殿院の設計段階では基本的に東西対称とすることを目指して施工したと考え、西半分で検出された遺構の標高と矛盾が生じないことを検証した上で、図61のように、東半を中心に戻原標高を提示するに至った。

南面回廊南方 朝庭の調査では、奈良時代から中世まで存続したとみられる礫敷（SX18650）を1層確認している一方、南面回廊の基壇際には、奈良時代の礫敷を2層検出しており時期は明確でない。そのうち下層の礫敷（平城第337次：SX18794／360次：SH18591／431次：SX19220）をI - 2期に機能したものと解釈し、検討を進めた。ただし、これらの礫敷は南面回廊南方のごく一部で確認したにすぎず、特にI - 2期の地表面が残らない東西端部は復元的に考えなければならないという課題があった。

確認している礫敷上面の標高をみると、中央部から東西にやや下がる傾向がある。そのため本検討ではまず中央部と東西の旧地表が残る部分との標高差から東西方向の平均勾配を求め、そこから東西端の標高を算出する方法で復原案を提示した。しかし、この方法で求めた標高は、西端で67.17mとなり、南面回廊遺構から復原される回廊基壇葛石上面の標高が68.18mと考えられるため（42～43頁）、回廊南面の基壇高が101cmと非常に大きくなるという課題があった。そこで、別の方法として、334次・431次調査で検出した基壇外装抜取溝底と、礫敷上面の標高差から、基壇が最小18cm、最大35cmで埋没していたものと仮定し、18～35cmの埋没分をかき上げた場合の礫敷上面の標高を求めることとした。基壇外装抜取溝が検出されていない箇所では、抜取溝の削平が最小であったと仮定して、外装が遺構検出面（地山またはI期整地土）直上に据えられたものとした。結果、回廊南面の基壇際の標高は、もっとも高い南門際で67.56m、もっとも低い西端部で67.36～67.53mと算出され、基壇高は最大82cmと求められた（図61）。

壇上 壇上のI - 2期の地表面標高を直接示す遺構には、北面・東面・西面の各回廊の雨落溝、後殿と軒廊の

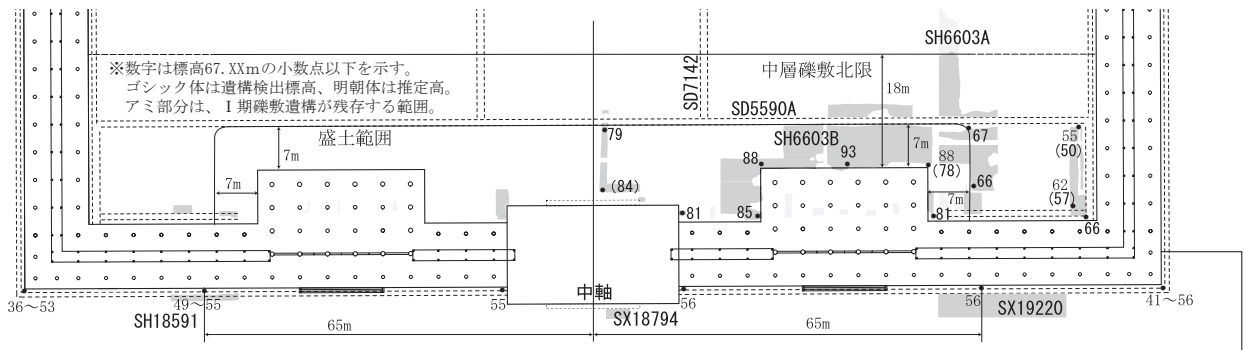


図61 南面回廊北方・南方の標高

雨落溝とがある。また、大極殿基壇外装抜取溝底の標高に、外装の埋没分7寸(20.68cm)を加えた値が、基壇際の標高として復原されている¹⁾。さらに、これまでの大極殿院の復原研究において、磚積擁壁と斜路の標高を遺構と基準尺から検討している²⁾。以上の遺構は、壇上にある建物および擁壁際に残る遺構であり、その周辺の平坦部は、雨落溝際に一部礫敷が残るため、礫敷であることはわかるものの、細かな地形の勾配変化については不明である。これに対して2002年度の復原研究では、最小限の稜線で構成される案と、大極殿のまわりに一段高い壇を造る案の2案を提示した³⁾。しかし、これには大極殿周辺が後殿周辺よりも標高が低く設定されるなどの疑問点がある。これらを踏まえ、現状で残る遺構検出面に地形の変化点を見出すことができないか、再検討をおこなった。この際、壇上の遺構検出面の勾配変化に対する、後世の水田耕作の削平の影響等を検討し、これが奈良時代の地形復原に有効であることを確認した。

壇上東半部における遺構検出面の標高を整理し、南北・東西方向の折れ線グラフを作成したところ、勾配変化について以下の特徴が見出せた。

- ①大極殿と後殿が建つ面はほぼ平坦である。
- ②南北方向では、大極殿前面より南で勾配が急になる。
- ③東西方向では、磚積擁壁の変化点延長線(大極殿基壇東辺から約22m)より東で勾配がやや急になる。

以上の特徴を踏まえつつ、はじめに列挙したI-2期の遺構から判明する標高や別途検討した斜路や回廊の復原案に無理なく整合する値として、図62の標高を復原案として提示した。なお、壇上の西半の地形についても、同様に遺構検出面の標高値を再整理したが、従来から言われてきたように、大極殿院西北部は軟弱地盤上にあり、検出遺構が北西方向にずれて、かつ沈下しているため、今回は東半と東西対称として考えた。

おわりに 今後は西面回廊付近と、回廊外側の地形につ

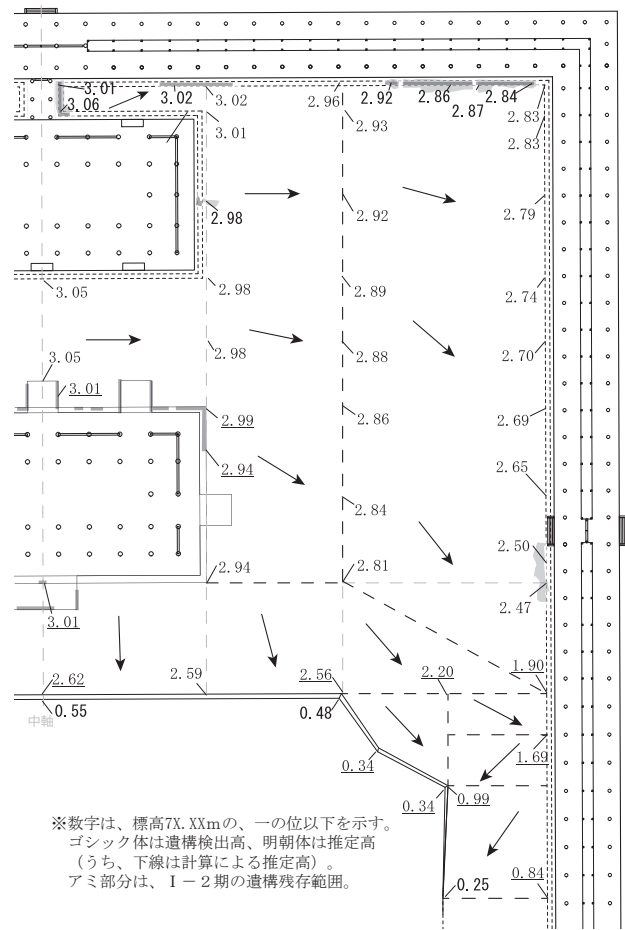


図62 壇上の標高

いて検討を進め、大極殿院全体の地形について、総合的に把握する必要がある。また、これまで二次元的に検討してきた地形について、三次元的な方法で視覚化し検証することが望まれる。
(高橋知奈津)

註

- 1) 奈良文化財研究所『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 I 基壇・礎石』2009。
- 2) 大林潤「磚積擁壁と斜路の検討」『紀要2012』。
- 3) 山本紀子他「平城宮第一次大極殿院地形と回廊基壇の復原」『紀要2003』。